

日英・英日バイリンガル児童の特殊拍認知

ダーラム大学 クロス尚美

0 はじめに

幼児期に日本語と英語をほぼ同時期に獲得したバイリンガル児童と、日本語を第2言語として学ぶ成人学習者の間には、音韻面において到達度に大きな開きがあることは、予想がつく。バイリンガル児童の場合、2言語に完全なバランスのとれたバイリンガルは少なく、どちらかの言語に偏るのが通常である (Hoffmann (1991: 22)) が、日本語を主とするバイリンガルと英語を主とするバイリンガルとの間では、音韻構造獲得達成度にどのような違いがあるのだろうか。

バイリンガル児童の特殊拍認知から音韻構造の獲得過程、および達成度を日本語モノリンガル児童と比較することにより、第2言語としての日本語音韻習得研究のひとつの足がかりとしたい。

1 先行研究

言語習得、言語獲得の先行研究には音韻習得を扱ったものが少ない。英語とフランス語のバイリンガル習得に関しては、カナダのイマージョンプログラムを扱った Hamayan, Genesee and Tucker (1977) や McLaughlin (1985)、ドイツ語環境でのイマージョンを扱った Moyer (1999) などがある。Harada (2000) はアメリカの日英イマージョンプログラムにおいて促音習得に関する研究を発表している。これらの研究成果に共通する点は、音声、音韻に関しては早期に日本語に接した児童の最終達成度がネイティブにより近いことであろう。しかし、早期エクスポージャーはひとつのファクターにすぎず、その他インプットの種類、形式、習得環境、また家庭環境などにも大きく影響されることを示唆している。

2 音節構造理論と習得研究における仮定

音節構造は頭子音、音節核、尾子音からなるとし、核および尾子音にはタイミングユニットとしてのモーラが付与されると考える。日本語においては、尾子音として促音 (通常2重子音として表記される最初の部分) および撥音のみが許される。長母音、2重母音は核の部分が枝分かれし、ひとつの音節の核内に2モーラ付与されるものとする。(Abe (1987)、Kubozono (1995)、Broselow and Park (1995) など)

本研究の習得過程に関する仮定として、「モーラアサインメント」仮定を設ける。日本語習得 (早期バイリンガル習得を含める) において、まずモーラ概念が確立し、次にモーラの位置が特定される (モーラのアサインメント) と考える。第1の段階では、学習者は全体のモーラ数の認知は確立するが、モーラ位置は特定しない。第2の段階で促音、撥音、長音のモーラアサインメントが確定する。

モーラアサインメントの確立にはインプットが必要であり、インプットの量と時期により、確立時期が異なるとする。また、第1母語の影響、および日英の識字能力の影響もあると考える。

3 研究の方法

英国在住の日英および英日バイリンガル 8 歳児各 6 名、コントロールグループとして日本語モノリンガル 8 歳児（英国居住歴 6 ヶ月未満）8 名とその父兄 8 名が被験者となり、人名、地名をテストワードとする調査をおこなった。

調査 1 では、昔話や童話などで馴染み深い登場人物名を用い、特殊拍（促音、長音、撥音）の認知と発話を調べた。絵本や絵カードをもちい、自然発話の中で登場人物名を口頭で回答させ、またそれを仮名で書き取らせた。調査 2 では、英国の都市名を借用語として日本語ではどう発音するだろうかという設問にたいする回答をまとめた。まず英語表記のカードを見せ、口頭で回答、その後仮名で書き取らせた。

コントロールグループにおいても、上記に準じて調査をおこなった。

調査 1 テストワード — 登場人物名

①	きっちょむさん	促音、撥音
②	つう	長音、撥音
③	おしょうさん	長音、撥音
④	いっきゅうさん	促音、長音
⑤	げんぞう じいさん	長音、撥音
⑥	ひよつとこ	促音
⑦	おじぞうさん	長音、撥音
⑧	いっすんぼうし	促音、撥音、長音
⑨	ちょうじゃさま	長音
⑩	おやゆびひめ	コントロールワード

調査 2 テストワード — 英国都市名

	ターゲット
①	Newcastle ニューカッスル、ニューキャッスル
②	Richmond リッチモンド
③	Basingstoke ベイジnstーク、ベイジングストーク
④	Scotland スコットランド
⑤	Tunbridge タンブリッジ
⑥	Stratford ストラットフォード
⑦	Banbury バンブリー
⑧	Darlington ダーリントン、ダーリングトン
⑨	Oxford オックスフォード
⑩	Bristol ブリストル

ターゲットのゆれは表記、第 1 母語の影響などを加味して考慮した。

4 結果

二つの調査の結果をモーラ数の認知、発話、書き取りに分けて考察し、子音と母音の挿入削除、入替えについて分析した。

調査1— 人物名

① モーラ数の把握

モノリンガル児童は全問のモーラ数を正しく認知、発話した。日本語に偏る（日英）バイリンガル児童は発話において98.3%、書き取りにおいて100%の正解率であった。英語に偏る（英日）バイリンガル児童の場合は、発話において76.7%、書き取りにおいて68.3%の正解率であった。

② 子音の挿入削除

日英バイリンガル児童は「ひょつとこ」の発話において、促音の位置を入替え、「ひよとっこ」と発音した。英日バイリンガルの場合、促音の位置の入替えのほか、促音の削除、撥音に加えて頭子音の挿入（例、おしょうさんぬ）、撥音と頭子音の入替え（例、おじぞうさぬ）などがあった。

③ 母音の挿入削除

英日バイリンガルの場合、頭子音の挿入にともなう母音挿入、長音の短母音化が目立った。

④ その他の置き換え

英日バイリンガルの場合、促音の長音による置き換えが目立った。

調査2— 地名

① モーラ数の把握と借用語形成ルールの適用

コントロールグループの日本語話者は未知の地名（例、Basingstoke）の場合、英語のスペルに影響を受け、gのあとに母音挿入をした。また、モノリンガル児童は家庭で耳にする日本語化した英語地名を習得していることわかった。コントロールグループの児童、父兄のデータとも既知の地名からの類推（例 Tunbridge と Cambridge）がみられた。高度の英語力をもつコントロールグループの父兄の場合、より原語に近い発音（例、ストラットフォードをストラトフォードとするなど）になる傾向がみられた。

日英、英日バイリンガルの場合、耳慣れない地名を日本語に直したあとも英語の発音の影響（例、オックスフォードをオクスフォードとするなど）がみられた。

② 子音と母音の挿入削除

日英バイリンガル児童は既知語については子音の削除（例、g）はみられなかった。反面、未知語については、類推可能な場合も原語により忠実に発音する傾向が強く、たとえば Basingstoke の場合、ベイジnstokと発音、表記した。

③ 置き換え

英日バイリンガルは促音を長音に置き換える傾向を示した。また、頻度は低い、長音を促音に置き換えることもあった。

5 まとめ

日英、英日バイリンガルをモノリンガル児童と比較すると、日英バイリンガルがほぼネイティブであるのに対し、英日バイリンガルは日本語の音節構造が確立していないことがわかる。普段の会話ではネイティブと変わらないが、未知語、耳慣れない言葉に遭遇した際、モーラ位置が確立しないことがある。発話と表記の結果を比べると、発話においてより正確である。

日英、英日バイリンガルの日本語音節構造の獲得度における格差は、日本語情報（インプット）量の差に比例する。音節構造習得において、まずモーラ数の把握が確立し、その次にモーラの位置付け（モーラアサインメント）が行われることがわかった。英日バイリンガルはモーラアサインメント習得途上にあるものと考えられる。

6 今後の研究課題

バイリンガルの音節構造習得においてみられる「モーラ概念の把握」そして「モーラアサインメント」の確立というステップが日本語学習者にもあてはまるか、またそれをどのように日本語教育にいかすかを、今後の研究課題としたい。

参考文献

- Abe, Y. (1987). Metrical Structure and Compounds in Japanese. Issues in Japanese Linguistics, Studies in Generative Grammar viii. Eds. T. Imai, M. Saito and K. Inoue. Dordrecht, Foris. viii: 5-52.
- Broselow, E. and H.-B. Park (1995). Mora Conservation in Second Language Prosody. Phonology Acquisition and Phonological Theory. Ed. J. Archibald. Hillsdale, Lawrence Erlbaum Associates, Inc.: 151-168.
- Hamayan, E., F. Genesee and G. R. Tucker (1977). "Affective factors and language experience in second language learning." Language Learning: A Journal of Applied Linguistics 27: 225-241.
- Harada, T. (2000). The Acquisition of Gemimates by Children in a Japanese Immersion Program. AAAL 2000 Conference, Vancouver.
- Hoffmann, C. (1991). An Introduction to Bilingualism. London, Longman.
- Kubozono, H. (1995). Perceptual evidence for the mora in Japanese. 4th Conference on Laboratory Phonology, Oxford.
- McLaughlin, B. (1985). Second-language Acquisition in Childhood II. Hillsdale, NJ, Lawrence Erlbaum.
- Moyer, A. (1999). "Ultimate Attainment in L2 Phonology : The Critical Factors of Age, Motivation, and Instruction." Studies in Second Language Acquisition 21: 81-108.